

# エゾマツ



*Petasites japonicus v. giganteus*

No. 32

1995. 3. 30

北海道ボランティアレンジャー協議会

## 目 次

1. 巻頭言 樹木の年輪に知らされて…………… 会長 大友 健…………… (1)
2. 日本人の自然観……………野幌森林公園事務所 小笠原 徳…………… (2)
3. 阪神大震災に学ぶ…………… (7)
4. 平成6年度を振り返って……………事務局、総務、研修、広報…………… (8)
5. 平成6年度 自然観察会を顧みて…………… (12)
6. 地方幹事からの便り…………… (15)
7. 会員の声…………… (17)
8. ことばの解説…………… (22)
9. 滝野の森を歩く……………小林 英世…………… (23)
10. 蝶に逢いたくて……………藤田 正次…………… (26)
11. ボランティア・レンジャーひとりだちの記……………今野 義也…………… (30)
12. 本の紹介…………… (32)
13. 研修会情報…………… (33)
14. 編集後記…………… (34)

## 樹木の年輪に知らされて

会 長 大 友 健

樹木の年輪は、光合成による1年間の成長結果を示しているものであることは、多くの人がご承知のとおりである。

四季のめぐりがはつきりしている日本の樹木は、全般的に年輪が一目で判り、樹種によっては、その年輪巾が一定の美しさを感じさせ、木工芸品及び内装材などに木目を活用されている。この年輪巾には、自然界における気象条件、立地条件、地形を主因子とする経緯を知る手がかりとなるものが多いのである。換言するならば、これらの因子が年輪を作りだしていると云うことになる。

年輪の美しさが見られるべき木口に、年輪巾が不整合で部分的に三日月形の濃色部が見られる場合がある。この部分を「あて」と呼び、木材界ではこの材を「あて材」として、商品価値の低くさから嫌うのである。

製材で板にした場合は割れやすく、柱にした場合は反りやすいと云う欠点があるのである。トド、エゾの構造材の場合、特に品等区分の第一因子ともなっている。

森林内の樹木で、このあて材の形成状態を見ると、針葉樹では傾斜している樹幹の下側に現れ、広葉樹では上側に現れている。トドマツのような白っぽい材では、茶褐色の三日月形をしている部分が見られ「あて材」と判定される。

「森と水の話」に書かれている、東先生のお話では、外力を受けて傾いた樹木は、細胞壁の厚い部分を発達させて、復元する成長過程は異常年輪として残されるため後年伐採した木口を見ると、自然条件の変動の発生年代と合致すると云われている。

戦後の林相改良と云う施策に伴う拡大造林作業の、適地判定の一因とされていた、地表変動の複雑な地すべり地形を現す経緯が、木口に渦巻形の模様として見られた当時を思い出し、植物としての樹木のデリケートさを、再認識させられるこのごろの生活である。

北島三郎さんの唄う「年輪」は、美しい活力に溢れた「エゾマツ」を想像させてくれるが。

## 日本人の自然観

野幌森林公園事務所 小笠原 徳

早いもので私が北海道へ渡って来てから30数年が経過している。しかしいまだに高校野球では、故郷岩手県の高校の応援に力が入り、周囲の輦蹙をかつている。私が故郷を意識するのは、高校野球の時ぐらいのものだが、故郷への心情とは全く別に、単に話のタネとして故郷を引き合いに出すことも多い。北海道の人は背景に、いわゆる、お国があって時として格好の話題となる。

しかし最近では、ルーツとなっている故郷を全く知らない若い人が増えてきており、話題にならないことも多い。テレビなどの普及で全国どこでも同一の生活感覚を共有できるようになり、また標準語という明治以後に作られた人造語が、方言に代って全国に普及し、お国、という感覚が善い悪いは別として、昔と今では全く変わってきているのだろう。

私が北海道へ行くということで、友人連中は「おい、北海道は標準語だぞ」と、皆が心配してくれた。ズーズー弁で馬鹿にされるなよという言葉に送られて北海道へきて、森林関係の仕事に就いたのだが、幸いなことに北海道には浜言葉と言う強い味方があって、あまりクニの訛は気にならなかったし、樹の種類や名前も、岩手とそう変わらなかった。スギとアカマツが、エゾマツとトドマツに変わったくらいのものである。

もっとも、ブラキストン線を持つ動物相とは違って、植物の方では大きく日本の生態圏を分けると、照葉樹林帯と落葉広葉樹林帯（ナラ林帯）に二大別され、東北、北海道

はあくくりとなるので森林相ではあまり違和感を感じなかったのだろう。

植物相というフィルターを通して見ると、わが故郷東北も北海道も同じ地帯ということになる。この植物相に時代のフィルターを重ねると、また面白いものが見えてきて、両フィルターの偏光作用で、縄文時代、弥生時代が見えてくる。

縄文文化、弥生文化の色合いの違いは、その背景にある落葉広葉樹林、照葉樹林にあるといわれている。もっともこれはあくまで色の濃さであって、イコールではないが。

日本の森林とりわけ落葉広葉樹林は豊かな生産性を持ち、世界で最も発達した土器文化を育み、狩猟採集生活における世界で最も密な人口を養っていた。ちなみに、世界最古の土器は長崎県で発掘されているが、当時その周辺は落葉広葉樹林であったという。

縄文時代すでに植物の栽培技術を持ちながら、農耕の発達が弥生時代までずれ込み、アツという間に普及した稲が、落葉広葉樹地域であまり普及しなかったのも、気候のせいだけではなく森林の生産性の高さにもあったのだろう。

作家の司馬遼太郎が面白いことをいっている。それは、奈良朝政権は弥生式農法の普及公団みたいなもので、全国に稲作の普及をはかったが、東北地方にはなかなか普及せず、坂上田村麻呂などを特使として威力で稲作を広めたというのである。

しかし考えてみると、自由に狩猟採取生活を送るのと、制約の多い農耕生活を送るのではどちらが幸せな暮らしなのだろうか。昨年大きなニュースになった、青森県の三内

丸山遺跡の発掘などでも、縄文人が豊かな消費生活を送っていたことが裏付けられ、なおさら考えさせられる。

新しい生活文化を広めて歩く田村麻呂は、その後も開拓期の北海道など、時代時代で、世界の至る所にいたのだろうか、それは人間の歴史の必然なのだろうか。

さて、東北地方に肩入れするために、東北地方が文化の中心地だった縄文期にこだわってみたけれども、日本人の精神的ルーツの面から縄文期を重く見ているものの一人に哲学者の梅原猛がいる。梅原によれば、日本文化の基層は縄文期にあるという。さらにその生活様式から考えて、縄文文化の色合いはアイヌ文化に色濃く残っているという。どうやら日本人の自然観を解き明かす鍵はアイヌ文化にあるらしい。

しからばアイヌの自然観とは何ぞや。ここでは全面的に宗教思想史の久保田展弘の説を、こちらで勝手に解釈してみたい。

久保田によれば、すべての存在にカムイ（梅原の表現では霊）を意識していたアイヌにとって、人と自然（生態系のあらゆる構成者）との間に自と他という距離はなかったというのである。まさに自然体で自然と同化していたのであろう。

しかし、この自然観が今の日本人の意識の底に脈々と生きているのだろうかとなれば大いに疑問である。

ここで一つのアンケート調査について考えてみたい。

北村昌美ほか昭和54・55年、日本とヨーロッパで実施した森林環境に関する住民意識調査がある。住民の自然観の一端を森林を通して探ろうとしたものである。この

調査によれば、日本人は森林に親しみ遊ぶという、意識も機会もヨーロッパの人々に比べ各段に少ないという。自然の中で暮らしていた縄文人の意識と、どうしてこうも様変わりしたのだろうか。

古い時代の意識の深層を探るためには、もちろん記録などはないから、宗教、祭事の側面から見るのも一つの方法かと思う。民俗学の佐々木孝明らによれば、縄文期から弥生期に移行するとき、埋葬などの宗教儀式や祭事で縄文文化から継承したものはほとんどなく、大半が弥生文化独自のものか、大陸から渡ってきたものだという。

縄文時代、人々の日常の中にあった、自然を自分の望む方に向けようとする呪術崇拜が、弥生期以降自然崇拜のアニミズムをベースに神道として形式化されていったのだろう。そして祭具としての常緑樹が象徴するように、照葉樹林そして水稻を背景に、その儀式が一定のかたちとなっていったのであろう。

ネパール・ヒマラヤから日本にかけて広がる照葉樹林地帯では、神話や儀式の面において、共通の文化的特色が数多くあるといわれている。また、司馬遼太郎によれば、日本の宗教意識の根源にあるものは神道で、その後日本に渡来した宗教は、いずれも神道という器の中に盛られたものにすぎないといっている。

どうも、今の日本人の精神的ルーツは、むしろ弥生式文化にあるのではないかというのが私の疑問である。

日本において森林は、昔から今日まで神奈備の森などとして神々の住むところであり続けた。しかし狩猟採取の生活から農耕生活へと変わる間に、森林との直接の接触が少

なくなり、森林は次第に近ずき難いところとなっていたのではないだろうか。万葉集にも山（森）はたくさん記述されているが、もうその時代には、古代文学の土橋寛によれば、それらは敬い見る対象となっているという。

つまりは、落葉広葉樹林と縄文文化を背景に持つ東北人としては、昔に還ってもっと縄文人のように自然の中に入ってみようよ、と言いたいのである。

日本人の生活感覚の特殊性を表す言葉として「日本人は、安全と水はタダだと思っている」と言う言葉が、かつて膾炙したことがある。これに加えるに自然も、と言えるのかかもしれない。日本の国土は、温暖多雨という気候帯のおかげで森林が自然の代表的な姿であり、大多数の人々にとって意識することなしに森林の恩恵に浴してこられた。

高度成長期の公害問題を契機に、自然環境についても大いに社会的関心を集めている。しかし前出のアンケートで見ても、日本では、自然はまだ大多数の人々にとって観念的な理解にとどまっており、親しみをもった本当に身に付いたものとはなっていないような気がする。

野幌森林公園としても、協議会の協力も得ながら、より大勢の人々を自然の中に誘い入れることが、これからますます必要になるでしょう。よろしくお願いいたします。

追記 私は長いあいだ、日本は森林国であり木の文化を持つ国であるから、人々は森林に深い愛着を持っているものと思っていた。したがって引用したアンケートの結果（森林を敬遠する傾向）については納得しかねるものがあった。原稿の依頼を機に、この疑問について考えを整理してみたが、硬く長い文になって恐縮しています。



## 阪神大震災から学ぶ

1月17日早朝、近畿地方を襲った「兵庫県南部地震」は、大都市を襲った内陸直下型地震としては、関東大震災以来の大被害をもたらしました。あらためて自然のエネルギーのすさまじさを感じずにはられません。

科学の進歩、産業の発達という人間の営みによって、自然を征服しようという驕りの態度は、結局人間のおよばぬ力によって、はねつけられる結果を見るおもしろいことです。

自然をあるがままに受け入れ、自然から学ぶ姿勢こそ、豊かな環境の中で恵みを受けながら生活できる基本なのでしょう。私達ボランティア・レンジャーの諸活動も自然に対し、驕らず謙虚な構えのなかで取り組むことが必要なのかも知れません。「兵庫県南部地震」を契機に、自然の素晴らしさや大切さをいま一度考えてみてはどうでしょうか。

### 1 月以降の活動

- 1月20日(金) ・広報誌「エゾマツ」32号 発行、発送
- 2月17日(金) ・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7
- 2月19日(日) ・観察会「滝野の森を歩く」 下見
- 2月26日(日) ・観察会「滝野の森を歩く」  
ボラレン 13名 一般 13名 計 26名 参加
- 3月 4日(土) ・森林公園事務所主催 冬の森の観察会 協力下見
- 3月 5日(日) ・森林公園事務所主催 冬の森の観察会 大沢口 協力参加
- 3月23日(木) ・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7
- 3月27日(月) ・三役会議 於：かでの2・7

# 平成6年度を振り返って

副会長（事務局長） 佐々木 幸 夫

平成6年4月30日に第9回北海道ボランティア・レンジャー協議会定期総会を「かでる2・7」で開催したことがつい先頃のように思う。

新しい役員構成（26名）で、今までの年2回主催の自然観察会から一季に6回にし、しかも野幌森林公園だけでなくニセコ神仙沼周辺、恵庭公園、滝野すすらん丘陵公園など道央圏とはいいながら、地域性を加味した自然観察会を試みたが、いずれも成功俚に終わったことは会員一同の絶対的な協力の賜物と、心から各位に厚くお礼を申し上げたい。

とにもかくにも計画通り実施出来たことに、大きな自信を持つことになったのは事実であるが、おごりたかぶらずに新年度はより充実した内容で、進めたいものとするのは私一人だけではないだろう。

新年度は、これらを基盤に計画化しなければならないが、役員各位にとっても真価を問われる年でもあろう。より真剣に検討を加え、本当に自然観察会が参加者全員楽しめ、その中から自然保護や自然の環境保全の機運が自然に高められるものにしたいものだ。

そのためには、案内の技術をより高め、無意識のうちにそれらの目的が達成出来る仕組みを学ぶことが必須要件となるのであるが、会員同志の積極的な自然観察会への参加が必要であり、一にも二にも体験することでこれらのレベルアップにつながると思う。会員各位はどう考えているだろうか。

会報「エソマツ」No.31でも触れたが、自然観察会の主催回数を大幅に増やしたことの第一義は、会員各位が如何に気楽に参加出来る機会を多くするかにあった。新年度もその思想は変更せずに進めて行きたいものと思っているが、一人でも多くの会員参加を希望している。

とにかく北海道ボランティア・レンジャー協議会の設立目的に沿って、小さな力でも纏まれば強くなる意識で頑張りたいものだ。

昨年末の自然観察会「野幌の森を歩く」12月4日に自治労全北海道庁職員組合から、社会貢献事業の一環としての携帯無線機、望遠鏡、双眼鏡など自然観察用品の寄贈があった。私達の組織に会員という貴重な財産があるが、さらに、自然観察会がしやすい道具が整備された。感謝とともに、これらの用品を会員各位

が有効に活用されることを望んでいる。

会報「エゾマツ」については、田村広報部長の積極的なご努力により内容がより充実されてきた。会員相互の情報交換や自然観察会案内に役立つものにと、誌面にその意が表れている。会員各位の熟読とそれらに対する反応を知りたい。「エゾマツ」についても会員各位が、より積極的に関わりを持つことを希望している。

本年度秋から北海道ボランティア・レンジャー協議会も10周年の節目を迎える実情から、先輩諸氏の今までの組織に対するご努力にお礼を申し上げるとともに、どんな形で10周年記念事業を行なったらよいのか、委員会を設置し目下鋭意検討中である。

これらのことについても会員各位の意に沿うことか、必要であることは論を待たない。いずれにしても第10回北海道ボランティア・レンジャー協議会定期総会が、昨年と同様「かでる2・7」で開催される。一人でも多くの参加を希望しているが、何にしても健康第一。季節の変わり目であり、より自然に対応させ、より一層の参加を通じてのご協力をお願いして、本年度の事業を概観した感想としたい。

(1955/3/15記)

## 総務部 1 年間を振り返る

佐藤 健一

会員の皆さんは各地でご活躍のことと思います。去年は猛暑で大変でしたね。札幌地区では当会主催の観察会を、今年度一挙に3倍の6回実施、それぞれ成果を治めました。

さて、今年も総会の時期になりましたが、昨年から会計年度が4月～3月となり年会費の納入方法に説明不足の点があつたりして、一部の会員さんに会費の納入に過不足のありました事、お詫び申し上げます。

過納入の方、不足納入の方、今回の会報に納入金額を記入した「振替用紙」を同封しましたので宜しく願い申し上げます。

総会は、4月15日(土)で皆様のお手元に案内状が届いていると思います。是非ご出席ください。

来年は、北海道ボランティア・レンジャー協議会10周年を迎えます。目下、役員の中から10周年記念事業実行委員会をつくり検討中です。来年度も皆さん宜しくお願いします。

## この一年間を振り返って(反省を含めて)

研修部長 瀧谷 尚 弘

長いようで短いものは時間の流れで、研修部を担当して早一年になろうとしています。

ホームグラウンドの野幌森林公園だけでなく、活動の機会をふやそうという試みから、ニセコ・恵庭・滝野で観察会を実施しました。これまでとは違った不案内な土地での観察会ということで、内心は不安がありましたが、参加された方々には様々な収穫があったことと思います。率先して観察会に協力してくださった会員の皆様には、この場をお借りしてお礼申し上げます。有難うございます。

非力な研修部を盛り立てる会員の皆様の協力があって、初めて観察会が楽しく有意義なものとなると確信しているからです。

さて、自分自身を振り返ってみますと、仕事に追われ、果たして十分に活動できたかどうか。今年は是非ともニセコにも行きたいし、朴の葉の香りのするスパゲッティというのも賞味してみたいと考えていますが……。

まもなく雪が融け、自然の活動が活発になれば、こちらも活動再開。いまから楽しみです。あの花は咲いているだろうか、あの木の芽はどんな形の葉になっているだろうか、あの木の枝の卵はどうなったか、今年もあの鳥はやって来るだろうか、といった具合に。

以前からそうでしたが、観察会の下見を是非会員相互の勉強会の場にしたいと考えておりますので、会員の皆様に参加を期待しています。

観察会の時の班編成、進行役の選定、資料の準備を含め、研修部として考えなければならぬ事はいろいろありますが、一つずつ積み重ねていくしかありません。

皆それぞれ仕事を持ち、また都合もあることから、研修部全員が集まる機会というものを振り返ってみますと、どうも無きに等しかったのでは。

今後はこうした点を反省し、改善していきたいと思えます。

## 活動の反省と新年度の展望

広報部長 田村 允都

広報の役割は言うまでもなく、本会の目的と活動の趣旨に沿って、会員皆様に役立つ情報を提供したり、紙面を通じ、各地に住む皆様が交流できるようにすることにあります。

平成6年度は、広報部のスタッフも一新され、新たな意気込みでスタートしましたが、当初考えた通りの紙面作りができたかどうか、いささか疑問が残ります。

しかし、少しでも会員の皆様の考えを紙面に反映させること、自然観察に対する知識や情報を提供していくということで、次の点を重点として考えました。

- ①「会員の声」コーナーを設け、会員一人ひとりが気軽に広報に参加してもらおう。
- ②各号に特集を組み、自然観察に役立つ情報を提供していく。
- ③「言葉の解説」・「本の紹介」を掲載していく。

このような事を中心に据え、会報「エゾマツ」を編集してきましたが、編集の意図が皆様に伝わったかどうか不安です。

平成7年度については、広報スタッフを2班に分け、斬新なアイデアを出し合い、読みやすい紙面作りに努力していきたいと思っておりますが、次の点を重点として編集していきたいと思っております。

- ①「会員の声」コーナーは継続していききたい。
- ②特集で、各地の観察会会場を紹介していききたい。
- ③季節やその時々々の自然ニュースを盛り込みたい。

これらの趣旨を実現するには、会員の協力なしでは不可能です。どうか、新年度も各地からの情報の提供や、日々の活動の様子をお寄せいただき、充実した広報「エゾマツ」をめざしていきたいと考えています。よろしく申し上げます。

## 平成6年度自然観察観察会を顧みて

- 1) 「ニセコの自然」平成6年6月26日10:00~12:00参加総数54名(一般42名、ボラレン12名)

25日の下見を兼ねた研修会は、9名の参加であったが勉強になった。本年度の試みとして「ニセコの自然」を地元の地方幹事である池田郁郎さんのご協力で実施したが、意外と好評でしかも札幌の人たちの参加が多く、室蘭や苫小牧からの人もいた。

参加した人たちには今回の自然観察会はほぼ満足して頂けたと思っている。神仙沼周辺は、森(林)、湿原、沼があり、様々な植生が観察できる。参加者から毎年神仙沼周辺での自然観察会をやってもらいたいとの意見もあったが、ニセコでは他にも良いフィールドがあるので、地元の池田さんらと相談し、より良い自然観察会を実施したいものと思っている。

(五十嵐 一 夫)

- 2) 恵庭市恵庭公園での「恵庭の自然」平成6年7月24日10:00~12:00は、私の予定していたルートと違っていたので、少し途惑いがありましたが、それなりに説明出来たと思っています。時期的に夏休みの日曜ということもあり、大抵の人は海に行っていると思われ、ボランティア・レンジャーも限られた一部の人しか参加していないので、もう少し多ければ良いと思いました。(協議会会員以外のボラレン3名参加) 参考 会員9名参加

事前の下見が、みんな揃って出来なかったのが残念でした。今回この自然観察会を通じ、恵庭自然研究会の存在を知ることが出来、接触を多くしていきたいと思えます。

今後の課題として

1. 市の広報以外の周知方法(新聞・テレビ・ウォッチングガイド等)
2. 参加者の地域範囲の拡大(開催場所の近隣市町村)
3. レンジャーの活用(協議会以外の近隣市町村レンジャーへの呼び掛け)
  - ◎観察会を利用したレンジャーの掘り起こし=協議会への加入
  - ◎レンジャーとしての活動の機会を作る

4. 地元の研究会や市町村との共催
5. 開催時期 などが考えられます。

(小 林 英 世)

3) 平成6年9月4日 9:30~12:00「野幌自然観察の集い」から、今回一般参加者128名と事前の予想を超える数で、各自多様な目的を持って参加されたものと思う。

自然観察会で常々思っていることを次ぎの2点について若干触れたい。

班編成に当たって、グループとかファミリーなどの扱いについて基本的に取り決めておくと、平均的な人数割りでなく臨機の対応が出来やすいのではないだろうか。ファミリーの場合、子供さんも大人同様に班の構成員として受付るとその後の正確な人員把握につながる。

なお、現状では1班10名以上の構成になると案内・解説に無理が生ずるようで、ボラレンの参加人数にもよるが、基本的に1班に数名のボラレンが望ましい。

安全対策については、連絡用トランシーバー、救急薬品等が整備されたり、今野さんの「野外救急講座」が会報「エソマツ」に掲載されるなど安全面に十分気を遣っていることは承知しているが、現場での事故の予防・突発的な対応や事後処理などの体制作りが必要ではないか。

(須 賀 盛 典)

4) 私は12月4日(日)の野幌森林公園での観察会が担当でしたが、観察会数日前になってから、用事が出来て折角の観察会に参加できなくなり、その担当をはずしてもらったのです。

ところが、当日その用事が無くなり急遽観察会に参加しましたが研修部の皆さんにご迷惑をかけ申し訳なく思っています。

来年度は担当になった観察会には下見から参加し、その観察会が「どうしたら、より一層参加者の皆さんが興味を引く内容になるか」を考えたいと思います。

(今 野 義 也)

5) 「人間が自然と共に生き続ける環境。自分を育くむ自然の仕組みを知り、自然のルールを認識し、一般の方にその橋渡しをすることが我々の目的である」と、ものの本に書いてありますが、一年を振り返ってみますと本当にそのような事をやったのだろうか。

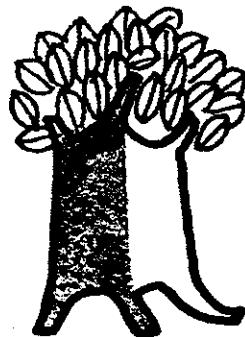
毎回同じ事をやっているだけでないか、野の花、小鳥の観察に終わっているのではないか、一步進めてその先のナゼ?には、追っていない。

参加者の五感に訴えると言っても、うっかりするとただ通り過ぎるだけの一日になってしまう。参加者は何か「教えてもらえる」と言う考えで来ているのが大方であろう(それでも良いのだが)。そのため、ついつい何から何まで一方的に「教える」になってしまうような事が多かったように思う。それらを考えると

- ① スタート前の心構えなどを開会の挨拶に含める必要があるのでは。
- ② 朝(出発前)のミーティングの中に、今日一日のテーマを出しては(地形・森・水等)。
- ③ あまり専門用語を使い過ぎでないか。我々には普通語でも、馴染みのない方には分からない。話しを聞いた子供が、父に質問するが分からずに落ち込んだ親。
- ④ ニセコなど各地の観察会は、前日の下見をレンジャーの研修会にしてはどうか。

私自身、なかなか勉強の機会が(本当は不勉強なだけ)なく、特に各地の歴史などを知りたいと思っている。

(田中利男)





## 地方幹事からの便り

その1

昭和63(1988)年7月29～31日、釧路管内標茶町茅沼シラルトロ湖畔で開催された第3回ボランティア・レンジャー育成研修会に参加。その折りにはるばると道央から駆け付けられ、熱心に入会を勧めてくださいました先輩各位の真摯な姿にうたれて、入会させて頂きました。

以来7年(とは言うものの、会費の納入を怠り会則に触れ会員でない一時もありましたが……)この間に、会報「エゾマツ」に自己紹介文を1回寄稿(それも編集者からの依頼で)、定期総会に1回出席と言う誠に恥ずかしい経歴しかありません。

こんな私が、“地方幹事”という大役を頂きただただうろたえるばかりで今日に至りました。第10回定期総会を目前にして、これではいけないと、いまさらのように自分を責めている次第です。

ところで、当地域には自然観察の対象が数多くあり、いろいろな機関や団体が、それを利用して観察会等の行事を実施しております。例をあげますと、市中にある湖としては日本最大の春採湖を中心に、市立博物館が主催して四季を通じて動植物の観察会、海岸での磯の生物観察会を、また、昭和62(1987)年に我が国第28番目の国立公園として誕生した「釧路湿原国立公園」を中心に、“釧路湿原ボランティアレンジャーの会”の観察会など、枚挙にいとまがないほどです。ですからその間を縫って独自の観察会などは、ちょっと無理ではないかと思われます。

それで差当り近くの会員が集まって、研修を兼ねた交流会を開いて互いに啓発しあうこと。前述の各種機関、団体が行なう観察会に積極的に参加する中で、我が会の存在を浸透させていくなどの具体的方策を立てなければならないと考えています。

ともあれ、協議会の指導と会員各位の示唆に富んだ意見を頂ければこの上ない幸せと思います。

(釧路 佐々木 文 雄)

その2

大変ご無沙汰しています。

ボランティア・レンジャーの活動も力を入れてしなければと思っていますが幾つかの仕事を持っていますので、自分の足元の十勝ボラ・レンまで手を付けられない状態です。

自分としては無責任のように思います。私の今の願望は、身近かな自然から自然環境を守っていくこと。その中から自然に親しみ、動植物を含めたいろいろな生物の生活や生い立ちを発見していくことが出来ればなぁ……と期待を持っているのですが、なかなかそこまで辿りつけないもどかしさを持っています。

総会もあることだし、出来れば参加し今後の展望として各地方ごとに観察会を兼ねた話し合い（懇親会？）が出来れば北海道ボランティア・レンジャー協議会の活動に連がるのではないかと（十勝ボラ・レン友の会も同じ）と思います。

（帯広 池田 啓介）

\*\*\*\*\*

## 第10回 定期総会

総務部より、定期総会のご案内がとどいていることと思いますが、下記の日程で開催されます。年一回の総会ですので、出席されますようご案内致します。また、総会に先立って、研修会も予定されています。

日 時	平成7年4月15日（土） 13:00～17:00
場 所	「かでる2・7」7F 710号室 (札幌市中央区北2条西7丁目)
内 容	13:00～14:50 (3名の方の研修報告) 15:00～17:00 (定期総会)

# 会員の



函館市 中村 忠夫

美深の研修会より「レンジャー」に加えて頂きましたが、どのような事から活動したらよいのかと迷っていましたが「平成6年度、全国自然歩道を歩こう北海道大会」(函館)に参加し、自然保護係員の後ろからお手伝いをさせて頂きました。

「社会の為に、何か貢献したい」と思い、今では小さい輪を広げたく、昨年より日本野鳥の会函館支部に入会しました。探鳥を楽しみ、樹林をぬい森林浴をしながら散策し、永年林務職員として得た森林植物を会員の皆様と共に勉強している昨今です。

愛別町 野呂 一夫

あの倉本聰氏の最近の著書に、「上流の思想・下流の思想」があります。NHK衛星放送で、椎名誠氏や毛利衛氏等、環境問題エキスパート9名との対談を採録した本です。既に読まれた方も多いと思いますが、私は自分で見付けたのではなくて、知人に教えられて読み、大層深い感銘を受けたのです。

会員とは名ばかり。何も出来ない者ですが、この本は“まだ”という方が、一人でも手にされることになれば些かなりとも——。そんな思いで拙文を寄せた次第です。



札幌市南区 田原 弘之

ボラレン主催の行事には仲々参加の機会がなく失礼しています。過日しさしぷりに「滝野の森を歩く」冬の観察会に参加しました。

ここはボランティアをしている盲人の歩くスキー大会で、冬・夏（冬のトレーニングを兼ねてのハイキング）4、5回は訪れる場所なのですが、ボラレンの方々の丁寧な説明に、いつもは走ってばかりで、じっくり眺めない森の木々に新たな発見があり楽しい半日でした。盲人と健常者が山を歩きながら教えたり、教えられたり、ささやかでもお役に立てばとがんばっています。

上砂川町 本間 重吉

会員の皆様には各所でご活躍をされております様子、心よりお慶び申し上げます。

私の所では、昨年研修会に2名を参加させ、自然の存在と共感し合える人づくりを目標におき、小さなグループで山野を散策しています。

個人が趣味の段階から得たものを他人に伝え、自然環境を大切にする気持ちは本当の意味で、人間を大切にする事だと考えます。自然を見る目を養い、今まで気付かなかった物が見えてくる事に依って、澄んだ空気、奇麗な水、豊かな緑、豊かな環境を満たす為に、今年も皆様と共に努力したいと思います。

札幌市北区 中館 侑子

昨年10月から週一回、某専門学校の地球環境学科という所で、将来動物や自然環境の保護に携りたいと希望する方々にデッサンを教える機会を得ました。フィールドノート作成の時に役立てたいというお話でした。美深で受講・登録後の活動参加は、昨秋の野幌下見会だけで、その際も他の方々の博識に呆然とした思いでした。環境保護に関心のある若い方々に少し



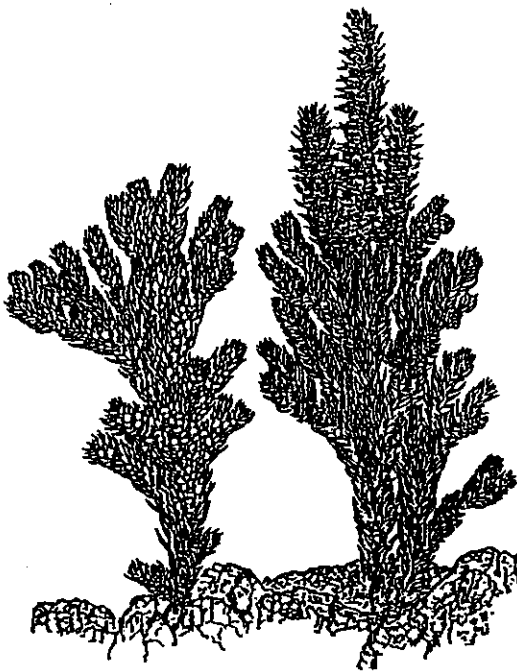
ばかりの技術をお伝えする事も、間接的には私に今できる活動への参加となるのでは……と思うこの頃です。

苦小牧市 南 誠 司

帰化植物が生態系へ侵入する時は、その生態系に対して何らかの影響が考えられます。在来植物でも本来分布のない所へ、しかも、人の手により移植されたとすれば当然、生態系への影響は大なるものがあると考えられます。

山野を散策し、「なぜこんなところに、こんな植物が」という場所に出くわすことがあります。樽前山のコマクサがそうです。誰が何の目的で移植したのだろう。

それぞれの地には、その環境に適した植物が適した姿で生育してこそ、人々の心を引くに値する自然の景観ができるものと思います。



Mannekinia Miconia S.

樽前山では、コメバツガザク、エゾイソツツジ、シラタマノキ、イワヒゲ等数多くの相応した植物が生育し、季節の移り変わりを演じています。

コマクサには、コマクサの生育に適した環境があり、どこにでもコマクサがあればいいというものではないと考えるのは私一人だろうか。

※ 樽前山7合目で、南さんがスケッチした「マンネンスギ」です。

マンネンスギ ヒガノカズラ科 常緑のツグミ、茎は上部で枝別れし、様々な樹の影となる。

## 春の訪れ

札幌市豊平区 簾内 道夫

この3月の休日に西岡や円山に何度もいき、冬の名残のなかに自然散策を楽しみました。

キタコブシのつぼみも一日と膨らみ春の訪れを告げています。森の中に響きわたる小鳥たちのさえずりも、恋の季節を迎えて一段と美しく聞こえてきます。

小鳥は異性に自分の存在を誇示するため姿も色つやも輝かせています。人間の「いろけ」はこの由来かしら？。

3月末で定年退職、今後ともよろしく願います。

黒松内町 柳澤 建次

この度、寿都郡の黒松内町に移り住みました。黒松内町が北限のブナ林で有名なことは皆さんよくご存知だと思います。

まず、私がこの町の町民になるまでの経緯を簡単にご説明します。私は生まれも育ちも神奈川県横浜市です。今から3年前に思うところあって、妻の実家がある札幌市に引っ越してきました。家から徒歩5分のところに西岡公園があり、無職の私はよく散策しました。これがきっかけで、草花や野鳥に大変興味を持ち、ボランティア・レンジャーの講習会にでかけていきました。また、同じ時期に黒松内町で行われた自然教室にも通いました。

暇に任せて自然に親しむうちにどうしても自然のそばで暮らしたくなり、1年間ひらふスキー場の近くで仕事をしました。しかし、ひらふ、ニセコあたりは観光化が進んでおり、私の理想とする自然ではありませんでした。意外に自由に歩けるところが少なく、観光ルートに乗った散策がほとんどです。結局1年住んだものの、その間も黒松内町へと足が向き、通ううちに友人もでき、町民になることを決心したのです。

黒松内町の魅力は、何といても自然と人々の気負わない関わり方です。天然記念

物のブナ林を町のシンボルとして大切にしていますが、大切にするあまり周りを人工的な公園に変えるような愚かなことはしません。夏場だけではなく、冬もカンジキで歩き回ることができます。誰でも自由に歩けますが、観光の町ではないので、やたらと人が入り込むことはなく、環境が荒らされることは少ないように思います。

ブナ林だけでなく、町周辺の自然も大切にされていて、自然と生活が溶け合っているという印象があります。私はこの町に本来の自然保護の姿勢を感じます。自然保護というと自然を囲い込み、自然散策というと、日常を切り離してでかけていく。札幌にいた頃はこうした感覚を強く感じました。しかし、この町のように自分のライフスタイルの一部に自然と親しむ行為があることが理想なのではないかと思います。見た目の整いより、自然の中に気軽に入り込める気持ちを育てる。そんな土壌を感じ、日々この町への思いが深くなります。

皆さんも機会を作って、一度来てみてください。深呼吸しながらゆっくり自然の中で過ごす、そんな時間をお約束します。



30号より始めた「会員の声」も、今回は8名の方のご協力を得ることができました。原稿依頼に快く応じていただきました、8名の方に心よりお礼申し上げます。

次号以降も、このコーナーを続けていく予定ですので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

# ことば の 解説

## 活断層

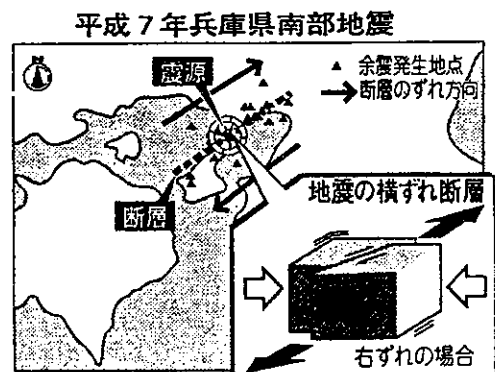
阪神大震災は、兵庫県南部の「活断層」にずれが生じたことによって引き起こされたものと言われています。

活断層とは「最近の時代まで活動しており、将来も活動する可能性のある断層」と定義されています。「最近」という厳密なスケールの規定はありませんが、現代の地質・地形学の分野では、一般に第四紀または第四紀の後期（およそ数十万年以降）を指しています。

地殻中に見られる大小無数の断層のうち、活断層はそのごく一部であって、他の大部分は過去の地質時代に活動を終わっています。けれども、活断層を他の断層と特に区別するのは、将来も活動する可能性があるからです。

最近活動したかどうか、活断層を判定する目安ですが、いくら若い時代にできた断層であっても、地すべりのように、地表の不安定による一度限り、偶発的と見られる断層現象の跡に対しては活断層とはいえません。地殻内部に広域かつ継続的に作用している力によって、過去に反復して活動してきた断層だけが活断層とよばれる資格をもちます。活断層も普通の断層と同じに、断層面を境に両側の地盤が相対的に上下に変位する「傾斜ずれ（縦ずれ）」型と水平に変位する「走向ずれ（横ずれ）」型があります。前者は正断層と逆断層、後者は右横ずれと左横ずれの断層に分類されます。

活断層による地震の再来期間は、最も活動的な断層でも約1000年、多くの断層では数千年から1万年以上です。





# 滝野の森を歩く

恵庭市 小林 英世

1995年2月26日(日曜日)、  
国営滝野すずらん丘陵公園で、今年最  
後ボランティア・レンジャー協議会主  
催の観察会が行われました。当日、朝  
の気温が低めでしたが、天候にも恵ま  
れ、なかなかの観察会日和となりまし  
た。事前の宣伝にもかかわらず、一般  
13名という参加者ですこし少なめに



思われましたが、ボランティア・レンジャーを加えて一班6~7名と、スキーを履い  
ての観察会としては話も通りちょうどよい観察会だったと思いました。

事前の下見をしていなかったのではどのような説明をしたらよいか少し不安でしたが  
事前の机上学習で冬芽について学んでおいたので、冬芽の付き方から説明を始めまし  
た。TAKINO SELF C GUIDE COURSE の散策ガイドを事  
前に読まなかったので判らない樹木もありましたが、コースどりの説明ができたと思  
います。

このコースには、1. オオバボダイジュ 2. キタコブシ 3. イヌエンジュ 4  
ハシドイ 5. ケヤマハンノキ 6. シラカンバ 7. ヤチダモ 8. トドマツ 9  
アカエゾマツ 10. カツラ 11. エゾヤマザクラ 12. ホオノキ 13. オヒョウ  
14. ノリウツギ 15. キハダ 16. イタヤカエデ 17. ヤマモミジ 18. シナノキ  
19. ハルニレ 20. ミズナラ の順に番号が付いています。また、番号以外の樹木で  
は、ダケカンバ、ウダイカンバ、ツリバナ、オノエヤナギ、ストロブマツ等が観察  
することができました。特に、シラカンバ、ダケカンバ、ウダイカンバの違いを知っ  
てもらうことができました。オノエヤナギのオノエとはどのような意味なのか聞かれ  
て困りましたが、知っている人がいましたら教えてほしいと思います。私は、因みに  
斧の柄にするからだと思うのですが、いかがでしょうか。

その他に、観察することができたものは、シマエナガ、シジュウカラ、アカゲラ、  
ハシブトガラ、セミの抜け殻、また、足跡では、キタキツネ(マーキング有り)、生活



跡としては、鳥の巣（何の鳥かはわからない）、変わったものでは、テングス病の枝などがありました。

今回の観察会の反省としては、木が高いので葉痕や芽隣痕が観察しづらかった気がしました。また、樹木の名前を教えるのが中心になり、五感を使った観察にはなかなかならなかったよう

に思えました。また、足跡がなかなか判別がつかないので、もうすこし勉強しなければいけないと思います。それに、いつも思うのですが、せつかくの冬に雪の観察ができればいいと思うのですがどなたか良い知恵はないでしょうか。

ふだんあまり利用しないフィールドなので、私たちにはなじみがない所なのですが樹木学習コースを選んだので、説明しやすかったと思います。

今後も、いろいろな所で観察会を開いていければいいと思うところです。

## 野幌森林公園冬の観察会を終えて

野幌森林公園管理事務所主催の冬の観察会が3月5日に行われました。当日晴天の中、一般約50名、レンジャー9名という参加者で行われました。大沢口出発をして、カツラ、ハルニレ、イタヤカエデ等名札の付いた木を中心に説明を始めました。次に、冬芽の付き方、頂芽、側芽、花芽、葉芽、芽隣痕、維管束痕と言った一通りの説明をし、樹形のかたちを見てもらいました。しかし、事前の下見をしているわけでもないので、何を説明していいのか解らない状態でした。まず、木の幹、大枝、小枝、そして、一年生枝、この枝に、冬芽のつくのを説明しました。次に、針葉樹の成長の状態を説明して、年齢の数を説明しました。野幌森林公園の森林態形の一部である二次林で有ることの説明をして、次へと進みました。雪面に、目をやればキタキツネ、エゾリス、と言った動物の足跡、また、散歩や、歩くスキーと一緒に連れて来る犬の足跡、いつたいどれが犬やらキタキツネやと、言ったぐわい。そんなこんなで

ヤマユガのまゆを見つけて、目をうえに、次に、ヤチダモの雄花、雌花の説明とつづく、これが、シラカバ、カラムツ、ウダイカンバ、クワと、木の説明、この辺までは、ほとんど隣片がある樹木、それから、しばらく歩いてクマゲラの食痕、そしてオオカメノキ、これが、裸芽との説明、花芽はウサギのような形をしている奴と教える。頭上をみあげてサワシバの種を見つけ冬芽の説明、また、目をしたにやりミズナラの頂芽、ジョウザンシジミの卵を見つけ一同歓喜の声、ノネズミの足跡を発見。そして、頭上に目をやり二羽のトビとなにやらちがった鳥、一同、あ・・・オジロワシ、よく見ると、二羽のオジロワシ、大沢口につき双眼鏡でオジロワシをよく観察する。そして、昼食、昼食の間に聴診器でミズキの水を吸い上げる音を聞く一般参加者、聞こえたのか聞こえなかったのかは定かではないが、それなりに満足していたようです。昼食後は、イワガラミとツルアジサイの樹皮の違いを見てもらい、エゾバッコヤナギの芽吹きを見てヤナギは、鱗片が一枚と説明し、ウラジロモミ、モミの仲間であるトドマツの葉と同じ様に葉先が二つに別れているのを確認してもらおう。ヤエガワカンバを見てもらい、次へと進む。パンフレットに載っているエゾニワトコ、ツリバナ、シナノキを見てもらおう。ケヤマハンノキで手が届くのがあったので、雄花、雌花、葉芽をよく観察してもらおう。ミズナラを見つけて、自分でジョウザンシジミの卵を見つける一般参加者。自分で見つけたほうが楽しみがあっていいと、うれしそうに探していた。ヤチダモノの林に入り、雄木、雌木の説明、この林は人工林で、昭和30年頃植林されたものであると話ながら林内を見ていると、梢に緑色の繭、ウスタビガの繭発見。大沢口近くになりゴジュウカラ、コゲラの観察。最後に、ツルマサキの話をしていると、何やら回りが騒がしい、スコープを覗く人の見ているほうを見ると、なんと、エゾフクロウ、何回か観察会に来ているのに始めて見る。わたしも感動したが、もつと喜んだのは、一般の参加者だったのでは。代わる代わる野幌の自然を守る会の人スコープを覗いていた。フクロウの動作動作に一喜一憂、歩くスキーの人も足を止めて見ていた。営巣木ではなく、日中来る樹だと言うことでした。今回の観察会は、天候にも恵まれたし、普段なかなか見られないオジロワシやエゾフクロウが見れたので、とても良い観察会だったと思います。 (研修部 小林 英世)

# 蝶に逢いたくて

—— アボイ岳 ——

札幌市 藤田 正次

6月4日、土曜日、AM4:30起床。部屋の窓から空をのぞくと薄曇り。まあまあ天気か。でも、久しぶりに有休も取ったことだし、とにかく今日の計画を進めなくては…。

その計画とは、蝶の写真を撮りにアボイ岳へ一泊の旅をする事なのです。持って行く物は、昨日の夜、全部車に積み込んである。後は、トイレに行って顔を洗うだけと…。あっといけね。歯をみがかねば！

AM5:10、車に乗り込む。お気に入りのバンダナを頭に結び、いざ出発！ とはいうものの、まずは朝飯を食べねばなるまい。一番近くのセブンイレブンへ直行する私であった。サンドイッチとトマトジュースを買い込み再び出発！（ちなみにサンドイッチの中身はヤサイとハムであった）朝飯を済ませ、一服したところで、今日の目標である蝶の事をあれこれと考える。

名前は、“ヒメチャマダラセセリ”。

なんたって、彼が住んでいる所は、アボイ岳しかないのです。そして、成虫が見られるのは、5月から6月の年1回発生。その上、翅の大きさが1cmそこそこで、飛ぶのは、むちゃくちゃ早いとのうわさ。色も地味ときている。はたして、彼に出会えるだろうか……？。

やがて、車は苫小牧を過ぎ、海沿いの道をひた走る。目の前に、海の青さが広がって行く。朝の光で輝きまくっている。反対側に目を移すと、緑におおわれた山々も光っている。天気心配なんか、必要なかった様だ。もしかして、今日はずいてるかもしれない。何となく、ヒメチャに逢えそうな気がする。

AM8:30、アボイ岳登山口到着。まずは、今日の宿泊場所を決めて、水分も補給しておかなくては…。（この頃、アボイ岳の高山植物が咲き初めているため、たいへん人出が多く、ようやく5軒目で、えりも灯台下の旅館がとれた。）

そんなこんなで、実際、登山口を出発したのはAM9:00過ぎ。アボイ岳の標高は810.6mこれが思ったより長い道のりなのです。ちなみにヒメチャに出逢う為には、7、8合目の馬の背がよいとの情報あり！まあ、のんびりと行きましょう。30分ほど登ったあたりから、目下に津軽海峡の青さが広がって来る。あの海の向こうに、わが故郷がある。そう言えばここしばらく帰っていない。少しばかり、感傷的になってしまった私なのです。（私のいなかは、弘前なのです）

しばらく進むと、森の中へ入る。途中、エゾシマリスに出逢った。彼女のしぐさがかわいくて、後を追っかけ追っかけ、何枚かシャッターを切る。彼女は、人には慣れていないらしく、なかなか近くに寄らしてはくれない。後で、出来上がったスライドには、彼女は小さくしか写っていなかった。や

は、野生動物や野鳥をそれなりに写し込むには、300mm以上のレンズが必要な様である。でも、私には、先立つものがない…残念！

次に出逢ったのは、ほにゃららハンミョウ。というのは、はっきりと名前を断定できない私なのです。情けない…。ハンミョウの仲間は、他の虫などを捕らえる肉食で、人が近づくと、前へ前へと飛んで、まるで、人に道を案内してくれている様に見えるので、彼らのことを”道オシエ”と言ったりするそうです。今度、もし彼らに出逢ったら、是非試してみてください。本当にそうなんですから！

そんなこんなしてるものですから、後から後から登山者に追い抜かれてしまう。

まあいつものことではあります…。

ようやく、5合目の休憩小屋に到着したのは、もうAM11:00過ぎになってしまった。ポカリスエット一缶とタバコを一服。また、すぐに出発。この辺から、登りが少し急になる。

7合目まで、一気に登る。俗に高山植物と呼ばれる花達が、登山者たちをやさしく迎えてくれるのも、このあたりからである。とは言うものの、名前を知っているのは、アポイアズマキク、ミヤマオダマキしかない。やっぱり、植物図鑑を持って来るべきであったと後悔する私であった。

いよいよ、馬の背が近い。目的のヒメチャに逢える可能性が高くなってきた。周りに注意を払いながら進むため、歩くピッチは、一段とおちる。しかし、全くヒメチャらしい姿さえ見ることができない。本当にいるのだろうか……？

馬の背も、もう半ばに差しかかったあたりで、レンジャーの腕章を付けた人が下山して来た。

「すみません、今年はまだヒメチャ出ますか？」

すると

「今年も、まだ見たっていう人がいないみたいだよ…」

ガガーン！！！！頭の中で何かが音を立てて崩れさり、フラッと立ちくらみを起こす私であった(ちょっとオーバーかな)。

そんなはずはない！そんな……。と思いながら、足を進める。やがて、馬の背を過ぎると、また急斜面。一気に登りで頂上へと向かっている。途中、エゾキスミレが満開であった。黄色いスミレを見るのは初めてなので、めちゃくちゃ感動してしまった。

”図鑑よりずっとずーっときれい”であった。が相変わらず、ヒメチャはおらず、気分は谷底状態である。ようやく到着した頂上では、占有行動をしているキアゲハが迎えてくれたが、やはり気分は地面を這いつくばっていた。そんな彼を見つめながら、昼食のおにぎり(具はすじことさけとおかか)にかぶりつき。これからの道順などを考える。なんたって、ここまで来たからには、男の意地にかけても、ヒメチャに、絶対！絶対！ぜーったい逢いたい！天気は、ばっちり良いし、風はほとんどなし。こんな良い条件なのだから、彼らが飛び歩かないはずはない。吸蜜する彼らの姿が目に見え

ぶ。でも、実際に目の前にいるのは、キアゲハだけなのである。

これじゃ、あまりに寂し過ぎる。だってさ、キアゲハだったら、札幌にもいっぱいいるもんな…。

そうだ！下りは、万幌のお花畑を経由して、馬の背にもどってみようっと！絶対にヒメチャはもう発生しているはずである。P1：00、再び出発！

景色を楽しみながら20分程歩くと、道が急になってくる。このあたりから、白いアポイアズマギクが、ぽつぽつ咲きはじめる。ちょうど満開という感じ。確か「北海道の蝶」に写っているヒメチャはこの花で吸蜜している写真だったよなぁ……などと思っていると、目の前を何か横ぎった。えっ今のは、確かに蝶だよなぁ。めっちゃくちゃ小さいけど…。もしかして、セセリ蝶？ということは、もしかしてあの念願の”ヒメチャマダラセセリ”かも？

急いで彼の後を追った。急な斜面もなんのその！その時、また、小さな蝶が前を横ぎり、4～5m先の下草にとまったのです。まちがいなくヒメチャだ！！少しずつ、少しずつ、静かに、静かに、彼に近づいた。シャッターを切る。やった！！

とりあえず、証拠写真は撮った。と思った瞬間、彼は飛び立ち頂上の方へ。何としても、今度はいい写真を撮らなくては…。私は、再び彼を追って、斜面を登る。すると、彼は今度、アポイアズマギクで吸蜜しているではないですか！

図鑑と同じだ。私は、這いつくばりながら、じわじわ接近。カシャ！カシャ！何とか二度シャッターを押したが、再び彼は飛び去ってしまった。

まるで、ハエの様に…。あ～あ、行っちゃった……………。

しばらく、彼が飛び去った方向を見送った後、初めての感激がじわ～と込み上げてきた。本当にここまで来たかがあった。少し前まで、地面を這いつくばっていた気分はどこへやら。今の気分はスペースシャトル”エンデバー”状態になってしまった。レンズを通して見た彼は、とにかくかわいかった。地味な茶系の色合いは何とも言えずきれいだし、毛むくじらの体もいい。それに、何といたって私ごみのみつぶらな黒い瞳なのである。これがなんたってたまらなくかわいい。みなさんにも是非見せてあげたいものです。

その場でしばらくの間、感激の余韻に浸った後、満幌のお花畑から馬の背へ抜けて、PM4：00過ぎまで、そこでヒメチャ待ち作戦を続行し、そして下山した。途中、ツバメオモトが咲き乱れていた。白いかわいい花で、図鑑を見るより、ずっとず～ときれい。

ところで、下山するまでの間、ヒメチャに何度逢えたと思いますか？なんと4回も逢ってしまったのです。それに、♂と♀そろった場面にも出くわしてしまうなんて、何てラッキーなのでしょう！

(求愛行動をとっていた様です)

その日は、本当に満足した1日でした。

しかしながら、残念な事に翌日は霧がたちこめ、登山をあきらめざるを得なかった。たとえ、登ったところで、ヒメチャは飛びそうにもないから……。

初めてのアポイ岳登山は、すばらしいものでした。山の上から見た景色や高山植物（特にエゾキスミレ）、そして、あのヒメチャのかわいらしさ。ハエの様なみごとな飛びっぷりに出逢えて本当にうれしかった。帰りの車の中で、来年も絶対にヒメチャに逢いに行く事を決意する私でした。（それ以後から出来上がった写真は、一枚も満足できるショットがありませんでした。ガッカリ!!）

ちなみに彼は天然記念物ですから、ネットで獲ると、手錠が待っていますから、皆さん見るだけにしましょう。

## P. S

蝶を追いかけてまわしていると、とても面白い事に気づきました。それは、同じ種の蝶の中でも、とてもすばしっこいやつとか、妙に人なつっこい？やつがいることです。そうなんです。個性がやはりあるみたいなのです。そう言えば、なんかの本に書いてましたけど、働き者のアリ達をじっと観察していると、中にはどう見てもさぼっているとか見えないやつがいるそうです。どこの世界にも、やはりいるものなのでしょうか？皆さんも、是非、なまけアリを探して見てはいかがですか？

## 今回の目標は

〔ヒメチャマダラセセリ〕 *Pyrgus malval* セセリチョウ科

食 草 : キンロバイ、キジムシロ

生息環境 : アポイ岳周辺の高山植物の見られるお花畑。

時に送電線下の刈り込みといった半人工的環境の低標高地に生息する。

年1回、成虫は5~6月発生。

国内では1973年、アポイ岳で発見された。

参考文献 「北海道の蝶」(北海道新聞社)

※ 全然関係ありませんが、うちのインコの名前は「ヒメチャン」です。

(アホな広報部員)

# ボランティア・レンジャーひとりだちの記

札幌市 今野 義也

私は平成4年7月の第12回ボランティア・レンジャー育成研修会を修了して『ボランティア・レンジャー』になりましたが、何も知らない名前だけの『ボランティア・レンジャー』でした。それでも、観察会にはなるべく参加するようにはしてきました。そしていつも「今野さんはこの班を持って下さい」と言われるのではないかとビクビクしていました。幸いにも一度も解説せず今日までできました。それはいつも熱心で詳しい先輩が多数観察会に参加しているからです。いつも私は『ボランティア・レンジャー』の腕章はしていますが、ほとんど一般参加者として先輩の解説に耳を傾け、それをメモし「よく知っているなあ、話がうまいなあ」と感心しているばかりでした。そうして回数を重ねているうちに最近「そろそろ独り立ちしなきゃならんかなあ」とは思っていました。そう思っているうちに3月5日の観察会を迎えました。その日は観察会開始の10分前に着き、一見したところ「一般の参加者はそんなにいないなあ」と思いました。ということは班編成は少なく、一つの班に数名のボラレンがつくなどいつものように思っていました。しかしその日はなんと一般参加者だけでなく、ボランティア・レンジャーも少なかったのです。五十嵐さんから「今野さんひとつの班を持ってみるかい」と言われました。ついに私が恐れている言葉が出てきたのです。しかしこうなった以上やるしかありません。「分かりました。やってみます」と答えついに『独り立ち』の時がきたのです。集合時間になり挨拶の後私が担当する班のところに行きい



よいよ観察会が始まりました。私の班は初めての参加者は半数ぐらいで、樹木に興味のある人と、鳥に興味のある人はそれぞれ半数ずつでした。わたしは「わたしはあまり詳しくないので皆さんと一緒に勉強したいと思います」と断わって行動に移しました。それから私の知っている樹のところで止まり「あの樹は何という樹でしょう？」から始まり特徴などを解説していきました。雪の上の足跡は私も分からないので以前にもらった資料と比べながら「ここがこうだからキツネですね」というように調べていきました。そうすることにより皆さん興味をもって見ることができ、特徴を知ることができました。今思えばこれが『ボランティア・レンジャー』の役目だと思うのです。『一緒に調べる』これが大切だと気付きました。観察会が始まってすぐ「やどり木はどんな木につくのか」と聞かれ、図鑑で調べて「こう書いてありますね」と返事しましたが、「それではこの観察会でどういう木についているのか見ていきましょう」と言って観察して行き、やどり木がついている木があったらその木は何という木なのかを調べて行けばやどり木という木をとおして数種類の木を知ることができたし、最初の疑問に答えることができたのではなかったかと後になってから思いました。この反省は今後の観察会で生かしていきたいと思っています。『一緒に調べる』これが参加者の興味を引くことになり、印象に残ると思うのです。こう考えると何か今迄肩ひじ張っていたものが急に楽になってきたような気がします。今後は肩ひじ張らず楽な気持でやっつけていこうと思います。もちろん事前の勉強もします。まだまだ未熟ですので今迄どおり先輩方のご指導よろしくお願いします。またこのつたない文章がまだ名前だけのボラレンの方の参考になれば幸いです。きっと自信がついてきます。是非参加してやってみて下さい。私も応援します。

# 本の紹介

## BOOK

沼田 真 著

### 自然保護という思想

岩波新書 1994.3.22 発行

定価 620円

人間は、自然生態系を変え、農林生態系や都市生態系をつくり出し、土壌から過度な収奪を繰り返してきました。その結果「文明人の歩いた跡に荒野が遺った」といわれるように、自然環境を破壊してきました。さらに、現代になると環境破壊が深刻化し、その原因の全てに人間がかかわっています。

このような現状の中で、私たちは自然とどうかかわればよいのでしょうか。

自然保護という用語や概念は、1930年代から使われるようになってきましたがIUCN（国際自然保護連合）や日本自然保護協会の成立などが、それを一層促進し一般化してきました。

著者は、生態学を専攻し、日本自然保護協会々長・日本環境教育学会々長を務めているかたわら、自然環境に関する著書が多数あります。

本書「自然保護という思想」は、5章の構成からなっていて多くの事例を引きながら自然保護についての考えを述べています。

- I. 自然保護の軌跡（・自然保護の歴史から ・第二の環境の時代等）
- II. 生態学の視座から（・環境問題に対する生態学的アプローチ等）
- III. 生物と環境（・環境とは何か ・生物の多様性をめぐって等）
- IV. 自然を知る（・現代生態学の思想的背景 ・エコロジーパーク等）
- V. 危機のなかの自然（・日本のなかの自然 ・保全生物学のために等）

著者の主張を本文のなかから拾うと「……結局のところ、自然保護というのは、人間が一段高い立場から自然をかわいがるという構図ではなく『人間-自然系』をいい状態に保つことにある」と述べ、自らの体験をもとに論じています。

# 研 修 情 報

## 「森林とみどりの技術者養成セミナーに参加しませんか」

北海道立林業試験場では「みどりの指導者を志す人」を対象に、森林総合技術セミナーの一環としてインストラクターリーダー養成講座を平成3年度から実施し、本協議会会員もレベルアップを図るために受講しています。

林試ではさらに時代にマッチした内容と、初級から専門的なカリキュラムの区分で、しかも経費を最小限とした林試の研究・普及に携わる人たちを講師に、そして整備された研修施設で学ぶことが出来るように配慮しています。

受講希望の会員は、別紙「フォレストガイド受講申込書」を直接下記に提出してください。

なお、所属は「北海道ボランティア・レンジャー協議会」とします。

〒 079-01 美明市光珠内町東山 北海道立林業試験場専門技術員室 ☎ (01266)3-4164

### 別表 森林総合技術セミナー

講座名	内容	とき	ところ(林業試験場)	主な対象者	摘要
フォレストガイド養成講座(Ⅰ)	森林の仕組みと機能、 森の動植物、森林レクリエーションなどの一般教養的学習	5月16~19日 (4日間)	本場(美明市)	みどりの指導者を志す人	
フォレストガイド養成講座(Ⅱ)	森林の仕組みと機能、 森の動植物、森林レクリエーションなどの専門的学習	7月11~14日 (4日間)	本場(美明市)	みどりの指導者を志す人	

受講を希望される会員は「森とみどりの技術者養成セミナー実施要綱」「フォレストガイド養成講座実施要領」を送りますので、事務局佐々木あてご一報ください。

## 編集後記

雪解けの暖かみの増してきた三月の空です。しかし、冬と春が行きつもどりつする季節でもあります。まもなく日当たりのよい山肌や湿地では、フクジュ草やフキノトウが顔をだし、キラキラと反射する雪解け水が、沢に沿って流れ出します。

平成6年度の活動が終わりました。活動の成果が得られたのと同時に幾つかの反省点もあります。この反省点を平成7年度の活動につなげる努力を会員の皆様の手によって進めなければなりません。

会報誌「エゾマツ」も会員の皆様のさまざまなニーズを汲み上げ、次年度の活動に生かせる紙面作りを目指したいと考えています。

平成7年度も、各地からの積極的な情報の提供を待っています。

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報誌「エゾマツ」32号 1995.3.30 発行

発行責任者 大友 健

(表紙題字 岡田 元北海道保健環境部長)